

アメリカから見たフランス

—在外研究報告—

円 尾 健

はじめに

いつの間にかすでに三年前のことになるが、大学から在外研究員として派けんされ、半年ほどフランスで過ごす機会を得た。自分としては、三回目ヨーロッパ滞在ということになる。それについては、すでに帰国した次の年にわれわれ仏文の同窓会報に求められて、『十六年ぶりのフランス』という短文をのせ、そこで要点は述べたつもりであるが、何分、原稿用紙二枚半というスペースだったので、ほんの骨組みだけに終わってしまい、本人としては十分に意図を尽くさなかつたうらみがある。

その後、この時の体験についてとくに話す機会もなく、また自分でもそれ以上深く考える機会もないままに今日に至ったが、恩師の桑原武夫先生が亡くなられたのをきっかけに、直接教えを受けた者の一人として少し発奮(!)し、日頃の怠慢を清算し、ささやかな経験ではあっても考えをまとめておこうと考えたようなしだいである。いつの間にか年長者の部類に入った人間として、後進に多少とも参考、ないしは役に立てば望外の幸いということになるろう。

こんどの旅行の特徴は、先の短文でも触れたように、はじめてアメリカ経由で大陸を西海岸から東海岸へと横断し、大西洋を渡ってフランスへ行ったということと、帰りはソ連国内を旅行して帰ったということ、つまりまがりなりにも世界一周を果たしたということである。今どき世界一周といってもとくに珍しいものではないし、金とひまさえあれば、だれにでもできることであって、かつてのマゼランの世界一周などにくらべると隔世の感があるが、ともあれ、個人的には多少の感慨なしとはしないのである。

いずれにしろすでに記したように、こんどの旅行は、まず第一に、「日

本人はまだフランスをよく知らないのではないか」という反省を強いられた一方、アメリカとフランス、ひいてはヨーロッパとの歴史的、文化的一体性をつくづく実感させられたということに尽きるだろう。

最初の点については、すでに二十年前、パリを中心として一年足らずではあったがフランス滞在を経験し、その後も一夏、ドイツのミュンヘンを中心としてヨーロッパ旅行をした時、出入にこれまたフランスを経由、文字通りの短期間ながら二度目の滞在はしているため、多少はフランスについて知っているような気がしていたが、それはしよせん錯覚にすぎなかった。当地での生活そのものについても、滞在のプランクが長ければ長いほど急には適応できないのである。今回は、ちょうど大学院に在学中の時のクラス・メートの新井君が朝日放送のバリ支局長としてパリに勤務中であつたため、昔のよしみで大いに厄介をかけてしまったが、かれに助けられていなかったら、すくなくともはじめのうちは費用が二倍ぐらいはかかったのではなかったかと思われる。パリは、昔住んだことがあり、行ったら何とかなるぐらいに考えていたわけだが、要するに考えが甘かったの一ことに尽きる。現実の生活は、フランスに限らず、どこでもそんなに甘くないのである。

目前の生活にしてからがこの通りであり、一回や二回の滞在で——それが多少長期にわたるものであっても——その国や文化がわかったと思うのがいかに誤りであり、危険なことであるか、今さらのように痛感する。当の国が、フランスのように長い歴史と文化を有していれば、そして、問題がその歴史や文化についての考察、批評、評価などの次元に到ればなおさらのことであろう。パリについても、その価値と意味が自分なりに呑みこめたのもやっと今回がはじめてであった。

以上述べたようなことは、単に海外に観光が目的で次々と名所を見て歩く一般のツーリストの場合には求むべくもなく、求める必要もないことからであるが、かりにもわれわれのように研究者の立場にある人間は十分留意する必要があると思われる。一回や二回の滞在経験から——それがごく限られた経験にすぎないということを反省もせず——いとも簡単に結論

を引き出し、たかをくくってしまうという危険がないとはいえないのである——かつての筆者自身のように。いずれにしろ、一国とその文化を理解するには、それなりの年月と経験が要るのであり、本来、容易なことではないということをあらためて痛感する。そして、この点でわれわれ日本人は決して恵まれた環境にはないということを想起するが、この問題は、ここではこれ以上触れないことにしよう。

ところで、今回の旅行の大きな収穫の一つは、先に記したとおり、アメリカ体験であった。以下において、それについて少しくわしく報告し、若干の考察をおこなうことにする。

1

今回ヨーロッパでの在外研究にあたって、アメリカを通してフランスに行き、帰りはソ連を通して帰国するという計画を立てたのはべつに大した動機があったわけではなく、この機会に何よりもまず現代を動かしている世界の二大超大国を一目見ておきたいという、ごく素朴な好奇心があっただけのことだった。それ以外のこと、たとえばアメリカの大学の仏文科を訪問するとか、むこうの仏文関係者と意見を交換するなどといったことは一さい考えもしなかった。要するに、行くまでは、フランスとの関連は一切念頭になかったのである。それでも二十日たらずの滞在中にフランスに関連した経験を三つばかり取り上げることにする。

海外旅行など珍しくもなくなったこの時代に、とりとめもない旅行の印象なんかを綴ったりすることはできるだけ避けたいと思うが、それでもアメリカの第一印象はやはり語るに足るもので、最初サン・フランシスコに降りて二、三日すごし、次いでそこからアムトラックという大陸横断鉄道で二日二晩かかって行った。まだ西も東もわからず、無我夢中で景色を眺めているうちに中央の山地——ロッキー山脈——を通り、着いたシカゴで目の前に広がるミシガン湖を見ていると、まるで自分が、巨人国に入りこんだガリバーみたいな気がしたことはよくおぼえている。シカゴの宿で、やっと日本の自宅に電話をした時、興奮のあまり「アメリカという国は、

想像を絶するところやぜ」などと口走ったりしたのであった。そういえば、あの時、電話の交換手に今日本では何時ごろだろうかと聞いたら、「明日の昼ごろだ」という返事が返ってきたのも忘れられない思い出である……。そのうちに、初めの興奮はさめてきたものの、こんな国では、文学でも日本の俳句みたいなものは、まず生まれまいだろうということが、実感として感じられた。

ところで、話をフランスとの関係にもどして、まだサン・フランシスコにいた時、町でワシントンでの美術展のポスター——フランスの印象派の展覧会のポスター——を見かけて、ワシントンに行ったらぜひ見ようと思いい、幸い最終日に間に合って行って見た。これは印象派の前後八回の展覧会を可能な範囲で復元してみせたものだが、日本では印象派のこんな規模の展覧会はちょっと記憶にない。たった一回や二回の展覧会だけで結論めいたことをいうのはおかしいにしても、フランス美術、とくに近代美術が相当程度アメリカに渡っていて、アメリカの美術館の協力がなければ、まともな展覧会も開けないほどだというのはよく耳にするところである。(この、アメリカの美術館のフランス美術の充実ぶりは有名な事実で、目下手元にデータを持ち合わせていないのが残念だが)。ともあれ、そういったアメリカでの、フランス美術蒐集の充実を裏書きするような展覧会であった。

シカゴからこんどはニュー・ヨークに飛び、それからワシントン、フィラデルフィア、ボストンと廻ったが、ニュー・ヨークではおのぼりさんの予定のコース通り、観光船に乗って、かのアメリカのシンボルともいえる有名な「自由の女神」にもお目にかかることができた。それまで、私はまったく知らなかったことなのだが、後にフランスで見た新聞にもあったとおり、これは、アメリカの独立百年を記念してフランスからおくられたプレゼントなのである。作者は、ラングルにあるディドロの像の作者バルトルディとなっている。(最近、同じフランスの協会から日本に別の女神がプレゼントされ、淡路島に建立されることがきまったと新聞などで報道されていた)。それからワシントンの町を見物していた時に、同行の日本

人からここはフランス人が設計したらしいと聞かされ、これまた私のまったく知らないことであった。たしかに、その後、新聞の記事などで確かめたところによると、フランス人の少佐で技師のランファンが、ヴェルサイユを模して設計した、となっている。先に触れた古い友人で朝日放送の新井君は、パリでアメリカの話をしていて談たまたまワシントンに及んだ時、この首都のことを「ヴェルサイユの単なるコピーで、フランス趣味をただ模倣したもの」ときおろしていたが、フランス人の設計とあれば、それはむしろ当然なのである。

広く世界的にアメリカの象徴とみなされる「自由の女神」がフランスからの、その独立百年を記念するプレゼントであり、アメリカの首都ワシントンの設計がフランス人の手になるといったことは、単なるエピソードなどといったものではなく、次にも述べるような、それ以上のフランスとアメリカとの深いかわりを感じさせるものといってよいと思うが、その意味で、日本でもっと関心を持たれてよいことではないか。

さて、三番目のフランスがらみの経験は、最後にボストンへ行った時のことである。ここには、「コモンズ」という、アメリカで一番古いかか云われる公園があるが、その一隅に「ラファイエット・モール」というささやかな記念碑が建てられている。ラファイエットは、いうまでもなくフランス革命の初期の大立物の一人であると同時に、それ以前にアメリカの独立戦争に参加して功績のあった「新世界の英雄」としてヨーロッパにその名を知られた人であるが、その碑銘によると、かれはフランス革命終了後の1824年に、ボストンの議会で招かれた。その時の来訪を記念してできたのが、そのモールで、そこには「新旧両大陸で、自由のために闘ったこの闘士を記念して」といった意味のことが記されている。私がこういう商売をやっている関係で、そういった記念物に関心を持つのは当然だが、それでもその前に立っていると、「アメリカはフランスである、そしてフランスはアメリカである」ということが、ごく自然にというか、否応なしにというか実感されてくるのである。そして、このような歴史的、文化的、思想的一体性といったものは、日本とフランスの間には一切存在しないと

いうことを考えずにはいられなかった。こういったことを理くつ抜きで、肌身で実感しただけでも、アメリカに寄った意味はあった。

以上、出発以前には予想もしなかった、フランスに関する経験を三つばかりあげてきたが、「自由の女神」にしろ、ワシントンの設計にしろ、あるいはラファイエットを通した米仏関係にしろ、フランスが現代アメリカに想像以上に濃い影を落としているのに気がつくのである。こういったフランス文明の世界的な拡がり、その国際性、普遍性といったものは日本ではまだ十分に捉えられているとは思えないが、フランス文化の本質を理解する上でも——とくにそれを全体として理解しようとする場合——もっともっと関心が払われてしかるべき事柄ではないだろうか。専門細分化の時代であり、それにはそれなりの理由があるとしても、専門々々と称してその中にタコツボのようにはまり込んでしまっただけでは外の世界が見えなくなり、自分のごく限られた狭い世界だけがフランスと思うことにもなり、結局フランスそのものを誤解してしまうということにもなりかねないだろう。

2

アメリカ滞在中の、フランスに関連した経験は以上のようなものであるが、アメリカで痛感したことは、アメリカそのものについても無知であったということである。われわれ日本人、とくにわれわれのように第二次大戦後アメリカの占領を体験した世代は、それ以後、現在にいたるまで——時代による違いは当然あるにしろ——物心両面で圧倒的なアメリカの影響下で過ごし、おかげでアメリカについても多少知っているように思っているが、本当は何もよく知らないのではないか、ということを考えさせられたのであった。そこで、帰ってから、手元にあったアンドレ・モーロアの鈴木福一訳『アメリカ史』（新潮文庫）をめくって見た。モーロアの歴史といえば『フランス史』が有名で——というよりは、日本でこれより他に日本語で読めるフランスの通史が本当に数えるほどしかないから、といった方が正確だが——よく知られていると思うが、「偉大な自由主義三ヶ国の歴史」として、『イギリス史』（1937年）、次いでこの『アメリカ史』

(1944年)、最後に『フランス史』(1947年)を書いている。そくに『フランス史』は、前の二つを受けて、大戦中のことでもあり、各地を転々としながら、祖国のことを考えて書いた、と著者は記している。

モーロアは主として伝記、歴史で有名な文学者だが、いわゆる専門の歴史学者ではないので専門的立場からの評価はどうか知らないが、まず文学者の手になるものだけに読み易く、つぎに、型にはまらぬ自由で柔軟な見方や発想があちこちに見られて示唆的であり、独自の価値を主張できるものだろう。現在は文化史的な立場から書かれた歴史が流行しているのは周知の事実だが、モーロアのはその先駆的な存在のように思われる。

ところで、『アメリカ史』はフランス人の目を通して見たアメリカ史といえると思う。とにかく反訳で上下二冊、一ぺんには簡単に読めないのが米仏関係のところだけ拾い読みしたしただいが、そこではアメリカとフランスの交渉が、植民地華やかなりしころから独立戦争、フランス革命へとかなりくわしくたどられていて、ふつうの通史や一般史では得られない事実が非常に興味深く読める。ここでは相互の交渉の歴史を通してアメリカの、そしてフランスの理解に多少でも寄与することを期待して、当面必要と思われるところを紹介してみよう。

はっきりフランスをテーマとして扱っているのは第一部「ヨーロッパ人のアメリカ発見」の第六章「アメリカのフランス人」、第二部「岐路に立つ」の第六章「フランスの参戦」、第三部「国家の誕生」の四章「フランス大革命」である。

「フランスの船乗りは、ヨーロッパでも最も冒険好きな方だった。殊に、その中のノルマンディーやブルターニュ半島の人々は常に冒険を愛してきた」と、モーロアは「アメリカのフランス人」の冒頭で書いている。アフリカのギニア海岸に植民地を創めたのは、フランス人のディエップの町の人々が最初であるし、また他のフランス人はニュー・ファウンドランドへ行った。ただ、植民地経営といった形を取り出すのはフランソア一世のころからで、1529年、スペインと平和を締結してから、イギリスのヘンリー八世と同じく、「黄金を満載した船のことを夢見るようになった」この王

は、1543年にサン・マロのジャック・カルティエが新航路探索のため、新世界に向け出帆するのを援助している。カルティエらは、ニュー・ファンランドに到達し、それから西進してある湾に入り、大きな河がそそいでいるのを見つけ、それをセント・ローレンス河と名付けた。また、この時にはじめてカナダということばが使われたようである。いずれにしろ、このようにして、初期の植民地——ニュー・フランス——が誕生したのであった。

その後、ニュー・フランスはblankを経て、宗教戦争のあとアンリ四世、さらにリシュリューのニュー・フランス会社へと引きつがれ、本格化して行く。ついでルイ十四世の時カナダはフランス王領の一部となる(1663)。それと同時に、人口も倍加した。

フランス国王は、ニュー・フランスの将来に望みをかけ、卓越した総督フロントナック伯を送りこむ(1672)。この時、その腹心として活躍したのが有名な、ルーアン生まれのロベール・カヴリエ・ド・ラ・サルで、この、「当時のあらゆる探検者と同じくこの大陸の西岸に到達することを夢想していた」冒険家は、1682年、結局、「驚くべき勇敢さをもって」、ミシシッピを河口まで下り、そこにフランス王家の紋章の付いた柱を打ち立て、国王の旗をひるがえしたのであった。1684年、かれはフランスに戻って、国王のルイ十四世にミシシッピ河口に植民地を建設するよう、熱心に進言している。それは王を讃えて「ルイジアナ」と呼ばれるはずであり、後に、カナダとルイジアナを合併し、フランスに膨大な領土を獲得させようという、遠大な計画であった。もしこの計画が成就していれば、その後のアメリカの、そして世界の歴史は大きく変わっていたことだろうが、それは「永遠のイフ」というものであろう。

モーロアは、ここでイギリスの植民地、ニュー・イングランドと、ニュー・フランスとの比較を試みていて、なかなか興味深いものがあるが、その後、この新大陸も旧大陸の争乱——イギリスとフランス間の新しい百年戦争(1688年—1763年)に巻きこまれ、両国はヨーロッパでもアメリカでも対決する。そして、さまざまな経過を経て、カナダとその住民のフランス人

は完全にフランスの手から失われ、パリ条約でフランスの植民地はほとんど剥奪されることになる。

このようにして、北アメリカのフランス帝国は消滅したわけだが、フランスのこの大陸開発事業は「多くの有能な人々の苦心になったものであり、その人たちの名は今日もおこの大陸に点々と残っている」。なぜ、この時の植民地経営は失敗したのか？ モーロアによれば、これらの先駆者たちは、(1)植民地人口の不足、(2)国内の軋轢およびルイ十四世以後の母国の無関心などで裏切られた。七年戦争のころ、フランスは植民地経営に必要なだけの制海権を持っていなかったし、ニュー・フランスは、ニュー・イングランドに比べて、あらゆる種類の天然資源に劣っていった。

植民地人口について、モーロアは、1754年の段階で、隣のイギリス植民地が人口百万人以上を数えた時、カナダはわずか八万の住民を持つにすぎなかったと書いている。前者は、後者の十五倍にも達していたのである。これでは、現地の間人がいかに有能で努力しても、とうてい最終的に勝利は得られなかったことであろう。この植民地人口の少なさの理由として、著者は、国民が本国を離れたがらないほどフランスが恵まれていること(傍点筆者)、及びフランス政府が、異教徒をひどく嫌ったことをあげているが、最初の理由は、フランスという国の性格や本質について基本的に重要なことを物語っており、とくに注目に値すると思われる。時あたかも啓蒙主義が徐々に力を得て行く時代であり、アンシャン・レジームの下で国民は特権階級の横暴と圧制とに苦しむ——それは決して基本的には間違いではないが——一種の暗黒の時代として意識されるのがふつうであるが、モーロアの指摘は、そういった時代の見方と鋭く対立するものがあるように見えるからである。

ともあれアメリカ大陸の発見と、植民とにフランス人が演じた役割が大きかったことを、モーロアと共に確認しておくことにしよう。「ミシシッピ河の全流域は、偉大なフランス人たちを表彰する記念碑で縁取られた凱旋道路として見るべきである」(これらの記念碑とは、即ちそこに生まれた幾多の大きな都市である)。一方、この植民地戦争の勝利者たるイギリ

すも、やがてその植民地にそむかれ、敗者たるフランスと同じ道をたどることになるのだが……。

1775年、英本国に対する北アメリカ植民地の独立戦争が生ずると、かつてパリ条約で屈辱をなめさせられたフランスは、そこに対英復讐のチャンスを見出し、アメリカもフランスの好意を感知してこれを利用しようとする。こうして、いろいろな経過を経て、1778年に米仏は同盟を結び、こうしてアメリカ独立戦争は新たな英仏戦争となった。1781年、米仏同盟軍はイギリス軍根拠地ヨークタウンを陥落させて戦局は決定し、1783年のヴェルサイユ条約でアメリカ合衆国の独立が承認されることになる。この時、フランス人としてはじめから戦争に参加し、「新世界の英雄」として名をあげたのが、いうまでもなくラファイエットであった。

この新しい自由の国の誕生は、大きく近代の方向を決定し、続くフランス革命にも直接影響を与えることになるが、ここでは、その近代における歴史的意義をよく捉えたモーロアのまとめ掲げるにとどめよう。「アメリカの独立戦争は、アメリカを変えたと同時にヨーロッパをも変えた。十八世紀のイギリス史上の最も大きな事件は、バステュー監獄の占領であるといわれているのと同じような意味で、この世紀のヨーロッパ史上の最も重要な事件は、フィラデルフィアの大陸会議であるということが出来る」。

フランスについてはどうだったか？

フランスでは、アメリカ戦争に莫大な戦費を要したことが王の財政を破綻せしめ、その没落の原因となった。若い共和国の実例、その権利の章、またその用語は、ロシャンボーなど若い将校たちの報告とともに、フランス大革命の先駆者たちにその思想の基礎を与えた。もっとも、フランスではこの思想がアメリカのそれとはかなり異って表現されたことは、1793年や、さらに下ってナポレオン時代において明瞭に見られる。だがそれにもかかわらず、フランス王政末期において、フランス人が合衆国についてその理念や範例を求めたことはたしかである。

以上、アメリカを通して見たフランスというか、米仏交流史というか、日本では——研究者の間でさえ——よく知られていなければあまり関心も持たれているようにも見えない領域を、モーロアの案内で少しのぞいて見た。近代におけるアメリカの世界的意味を考えて見れば、その意義はだれの目にも明らかであろう。フランス研究であれ、フランス文学研究であれ、専門研究の必要は今さらいうまでもないことだが、同時にヨーロッパ的視野、さらには世界的視野で見ることの必要を痛感する。その点で、この小文が多少の参考にもなればまことに幸いである。

(以上は、昨年の秋の関大仏文学会での発表をまとめたものである)

(本学教授)